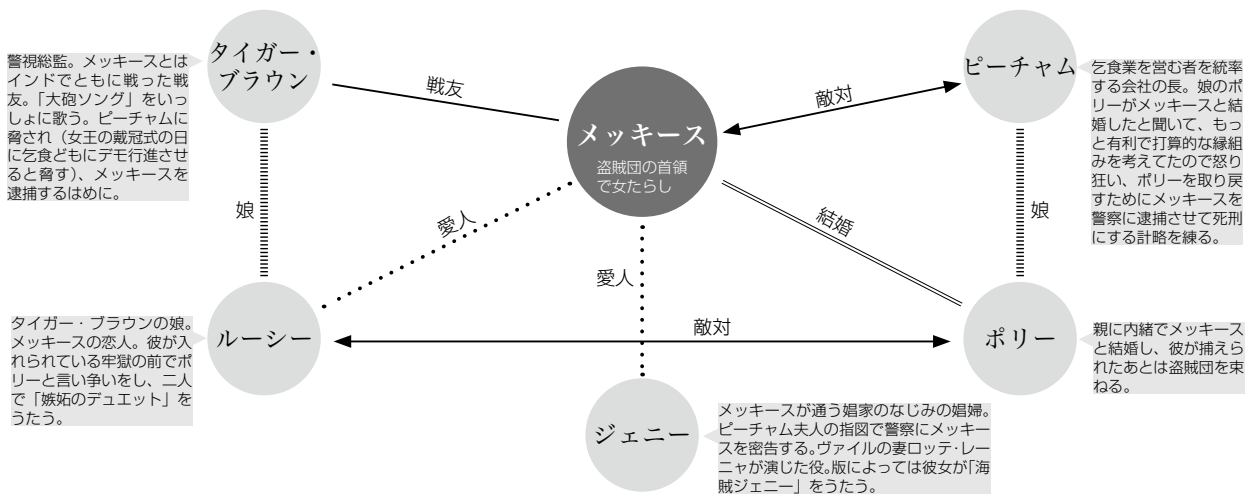


三文オペラ

参考資料

フレヒト／岩淵達治訳『三文オペラ』（岩波文庫）
岩淵達治著『三文オペラを読む』（岩波書店）
CD『三文オペラ』（1958年、プロデュース＝
ロッテ・レーニャ、SONY）

ベルトルト・フレヒトが作曲家のクルト・ヴァイルと1928年にベルリンのシッフバウアーダム劇場の柿落しのために作った音楽劇作品。18世紀初頭の英国の作家ジョン・ゲイのバラッド・オペラ「乞食オペラ」を土台にし、フランソワ・ヴィヨンの詩を多く取り込んで書かれており（イギリスの諷刺諧謔＋フランスの放恣＋ドイツの徹底性）、悪漢、ごろつきどもが騙し騙されのファルス劇を演じるもので、初演から大当たり、ヨーロッパ各地でさかんに上演された。最初のほうで歌われる「モリタート」（マック・ザ・ナイフ）はジャズのスタンダードにもなっている。



▶薔薇を知らない人間は薔薇を初めて見てその棘の多さといかつさに驚くだろうが、この「三文オペラ」も棘だらけで、皮肉で非情なやり取りや行動が織り合わさって物語を作っていく。その最たるものが、主人公メッキースの科白にある、銀行強盗よりも銀行設立のほうがはるかに犯罪的なのだという、ひょっとしたら真実かもしれないと思わせる金言であり、貧乏人を地べたに押さえつけておく、上層が支配する世の中の巧緻な仕組みを暴こうとする光が至る所で放たれる。

▶フレヒトの言う「異化」とは、観客が通常の演劇の舞台上で演じられるドラマに没入し同化するのとは反対に、それから距離をとって相対化して舞台を眺める態度を観客に求めることで、劇成立の根本の原理を覆そうとする手法でありフィクション思想。それと関係しているのか、この劇の冒頭で乞食の頭領のピーチャムが「私のビジネスはひどく難しい。なぜって、人間の情に訴えるのが私の商売ですからね」と言うのは、従来の演劇は情に訴えて稼ぎをあげる乞食の芝居に等しいのだと言っているようにも聞こえる。

▶偽善とか偽悪とか、そんなうわついた表層は微塵もなく、極道ビジネスを正直に生きる男たち女たち、ろくでなしどもばかりのえげつなくも大真面目な、ロマンティズムの欠片もない歌芝居であり、面白い歌がたくさんうたわれるが、ことに「海賊ジェニー」「ヒューマン・コンディションの不確かさ」「ソロモン・ソング」などは忘れられない印象を残す。

▶最後のとってつけたような「めでたしめでたし」の可笑しさ。女王によって、メッキースは赦されたうえに、貴族になり、城と年金をもらおうというのだから笑止。この芝居は所詮茶番なのです、観客の皆様のお気に召すように、縛り首とは別の結末を用意しましたとピーチャムが語る、その馬鹿馬鹿しさが従来の劇にありがちな「劇的展開」を小馬鹿にしている。